



あこう通信

～「いい顔 いい声 いい心」～

発行：令和5年12月4日（月）NO.18 文責：副校長 津田 幸一



学校HP URL <http://www.nagasaki-city.ed.jp/kosakaki-e/index.html> （2次元コードからどうぞ）

新しい見方・考え方

ぼくはお母さんの子
Aくん（2年生）

ぼくの足のうらには、あざがあります。左足の太もものうらで、半ズボンをはくと、ちょうど見えるところです。今まで、だれも、あざのことを言う友だちはいなかったの、すっかりわすれていたのに、2年生になって、「足にきたないものつけている」と言われて、気になりはじめました。何度も言われると、「ぼくは、きたなくないよ」と言いかえそうと思いました。でも、声にならなくて、くやしくて泣きそうになりました。家に帰って、「お母さんのバカ。なんでぼくの足にへんなものつけて生んだんだ」と言うと、お母さんは、あっけらかんと「あっ、足のあざのこと。あれはお母さんの子どものしるしなんよ」と言ったので、ぼくは、すっこけました。そして、お母さんは、あざのことを話してくれました。

弟2人にも、同じようなあざがあること。（弟の）Bは、ぼくと反対の右足だけど、はだの色が黒いから、あまり目立たない。（別の弟の）Cは、色が白いから、みんなにわからないように、おなかに、うすいちやいろのあざになっていること。

いろいろ話しながら、弟たちの足や、おなかを見ると、だんだんころころがおちついてきました。話をしている、一ばんうれしかったのは、お母さんにも赤ちゃんのおしりみみたいな青あざがあるということでした。一ばんわらえたのは、ぼくのあざを見つけた時のお母さんのようすです。

生まれてすぐに気づかなかったぼくのあざを見つけた時、お母さんは「どうしよう。紙オムツのテープがくっついてとれなくなって、あとになっちゃった。」と思ったそうです。おちついて考えると、そんなことありえないのに、あわてもののお母さんです。弟たちが生まれて、2人ともあざがあった時、今とは何かびょう気かもしれないとかなしくなったそうです。ぼくだけでなく、お母さんもなやんでいたなんて、うれしくなりました。

「地しんがあたって、はなればなれになっても、このしるしがあれば、お母さんの、Aたちをすぐに見つけてあげるからね。」

と、とくいに言うお母さんを見ていると、友だちに言われてくやしかった気持ちは、どこかにふっとんでいきました。

今ど、何か言われたら、「くやしかったら、あざをつけてみる。」と言ってやろうと思いましたが、「これは、ぼくのうちの子どもの子るしなんだ。いいだろう。」と自まんしたくなりました。

（朝日全国小学校低学年作品コンクール入選作）
A/B/Cの表記修正は津田

消すことができない痣を泣くほどに気に病む我が子に向かって、このお母さんの言葉は完璧です。思わず「お母さんのバカ・・・」という抗議をしても、「私の子のしるし」という一言で、Aくんはすっこけてしまっています。

家庭教育での言葉の力です。

このすばらしい一言が生まれてくるまでにお母さんが味わってきた人知れぬ苦悩の深さを知った時、Aくんは本当の幸せと喜びに気づきます。

このことは、「お母さんもなやんでくれていたなんて、うれしくなりました」という言葉に表れています。お母さんとのやりとりを通して得た、新しい見方・考え方は、Aくんにとって一生を支えていく力になっていくことと思います。

さて、学校では、児童の様々な交友関係のトラブルがあります。

私たち教員は、そのケースごとに、当該児童や学級級全体に指導をしています。同時に、個に応じた教育相談も行っています。そこでは、必要に応じて、まさにこの作文のごとく、新しい見方・考え方を示すことも行っています。

『切り替えられる強さ』を育てていきたいという思いです。

10月・11月の一場面



11月全校朝会（表彰）
作品展・小体会

体育科授業
6年ベースボール型ゲーム

中休み縄跳び
冬の体力づくり

校外学習
3年生さるく第2弾

